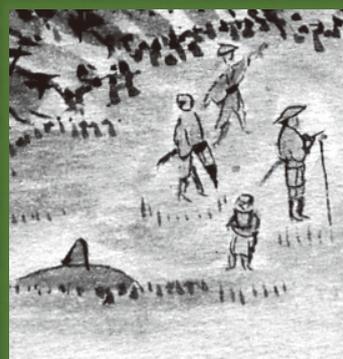


真澄

MASUMI
No.31



第61回企画コーナー展



真澄片手に男鹿半島へ

平成25年 7月6日(土)～8月25日(日)

1 「雄鹿名勝誌」の旅

明治十六年（一八八三）、狩野徳蔵

明治初期の秋田のジャーナリスト・狩野徳蔵は、明治十六年五月二十四日から六月五日にかけて男鹿半島を遊覧しました。その模様は、徳蔵が編集人を務めた「秋田日報」の記事から知ることができます。

この遊覧をもとにして、翌十七年には、男鹿の景勝地を紹介する『雄鹿名勝誌』を出版しています。いわば、明治版旅行ガイドブックと言えるものです。

この中で徳蔵は、真澄遊覧記をしばしば引用しています。引用書の中でもっとも多い引用となっています。また、この本が、真澄の記述を引用した刊行物としては最も早いものとなります。ですから、「真澄片手に男鹿半島へ」遊覧した、もっとも早い例と言えるでしょう。

現在、男鹿半島に関する真澄の日記五冊は、「男鹿五風」と総称されています（詳しくは、柳田国男の「をがさべり」の旅で紹介しています）。

しかし、徳蔵の引用は、『男鹿の秋風』、『男鹿の春風』、『男鹿の寒風』の三冊、それに八郎潟の水下漁を記録した『氷魚の村君』にとどまっています。これは、明治十六年当時、『男鹿の鈴風』と『男鹿の島風』の二冊が未発見であったことによります。

『男鹿の島風』は、明治二十一年に狩野良知によって旧藩主佐竹家に献上されました。また、『男鹿の鈴風』は、明治二十二年、『軒の山吹』、『勝手雄弓』とともに真崎勇助によって佐竹家に献上されています。

徳蔵は、明治二十五年に『雄鹿名勝誌』の再版本を出版しています。表題を「増補 図入」としたように、この時に初めて男鹿半島の地図を附けました。

また、再版本に初めて附した自序には、文化年中（文化元年（一八〇四）の地震によって象潟が田畑に変じた今、男鹿の称揚を意図した出版であることを述べています。西海岸を舟でめぐる「島めぐり」こそが男鹿の偉観であるとしても注目されます。

『雄鹿名勝誌』における真澄遊覧記の引用は、「真澄遊覧記には」「菅江真澄の説に」「遊覧記に」などとして十一箇所、また、ナマハゲの記述には、書名を示さないまでも、『男鹿の寒風』の図絵からの影響が見てとれます。



『雄鹿名勝誌』附図（明治25年版）

2 「をがさべり」の旅

昭和二年（一九二七）、柳田国男

昭和三年、柳田国男は岡書院から『雪国の春』を出版しました。この中に、「男鹿風景談」の副題を持つ「をがさべり」が収められています。

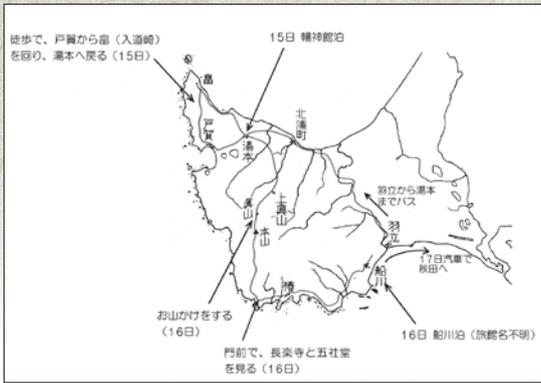
柳田国男は「をがさべり」で、観光と開発を両立させながら、男鹿独自の位置をいかに築いていくかというのを全体のテーマとし、そのために、真澄などの先人が残した記録から、自然や文化を活かしていく道筋を見つけることが必要であることを述べています。

柳田の旅は、「五月第三の土曜日曜であった」（第一章「花と日の光」）ことから昭和二年五月十六日と十七日に行われ、文章は、東京朝日新聞秋田版で同年七月五日から十五回にわたって連載されました（連載間隔等については不明。切り抜きは、秋田県議会図書室『古今帖』第四十巻所収）。

新聞連載の十五回のうち、第十回の記事だけは、単行本収録にあたって採用されていません。これは、文章の内容に不適切な部分があったためと考えられます。

男鹿が特に鹿の食害に悩まされていたのにも関わらず、「ごくまれには山畑が荒される位であったら」鹿が居ても差し支えないと書いた文言を、不適切な部分と判断したためでしょう。

柳田の男鹿遊覧は、秋田の民俗研究者である奈良環之助の道案内によるものでした。このことは、「柳田国男先生と秋田」という文章から知ることができます。初出は『叢』（昭和三十七年十一月）ですが、『男鹿文苑』



※『雪国の春』附図に、「柳田国男先生と秋田」から知ることができる旅の行程を示した。

(昭和二十九年、男鹿史談会) で読むことができます。奈良環之助による回想には、年月の錯誤が見えますが、内容は「をがさべり」の取材の道案内を間違いないで示しています。ここで注目されるのは、真澄の男鹿に関する五冊の日記を、柳田が「男鹿五風」と総称していたことを書き留めていることです。現在ではよく知られた呼び方ですが、柳田が昭和二年の旅でそう呼んでいたことを示す、貴重な証言と言えるでしょう。また、柳田の取材の仕方などについて、環之助は次のようなことを書き留めています。キジの鳴き声を聞きながら、真澄が鹿の鳴き声をよく聞いたことを思い出したと言う。

- ・植物の方言名を聞いていた。
- ・ガイドの青年に、メモも取らずにナマハゲのことを詳しく聞いていた。
- ・青年が話す方言が分かるかと聞くと、柳田は「大体のみこめるね」と答えた。

3

男鹿五風をめぐる

展示では、男鹿五風と総称される真澄の五冊の日記から、次に示す図絵や事柄について紹介しました。



展示風景

- ・『男鹿の秋風』…永源寺の芭蕉碑、朝鮮銭「常平通宝」の図絵、常平通宝(館蔵)、「椿の浦」の図絵
- ・『男鹿の春風』…大滝の図絵、
- ・『男鹿の鈴風』…エジヨロ(さく葉標本)、黒崎の白蔵(さく葉標本)、水島の図絵
- ・『男鹿の島風』…大棧橋の図絵、『雄鹿紀行』(吉川五明著、男鹿市教育委員会蔵)
- ・『男鹿の寒風』…「滝の頭」の図絵、ナマハゲの図絵、文化七年男鹿大地震の記録として『汲古録』(真崎勇助旧蔵、大館市立中央図書館蔵)

○八房の梅(『男鹿の秋風』の記録)



図絵(部分)



石川理紀之助筆「八房の梅」(軸装)

明治30年(1897)、適産調べ中の理紀之助が、八房の梅の歌を三首詠じた。「梅」の字を中心に据え、枝を広げるかのように文字を散らしている。(男鹿市・安藤松治郎氏蔵)



複数の実は、大きくなるにつれて次第に落ちていくと、八房の梅を世話する大淵秋雄さん(男鹿市脇本)は語る。座論梅の語源でもある。



普通の梅に比べると花弁(花びら)が多い。雌しべが多いことから、そこが受精して複数の実となる。座論梅、品字梅などの別名がある。

4

文人墨客の男鹿紀行

・竜王の面は雨乞い祈禱に神主が被り、丹塗りの鼻高の面は雨上げ祈禱に被ったという。竜王の面は秘蔵されて、真澄は見ることができなかった。



面の部分だけを抽出(軸装資料は男鹿市・天野大式氏蔵)

○光飯寺宝物面(『男鹿の春風』の記録)

- 益戸滄洲(俳人、漢学者) 『鹿の細道』宝暦四年(一七五四)八月三日〜十二日(現在の暦では、九月十九日〜二十八日)
 - 吉川五明(俳人) 『雄鹿紀行』天明元年(一七八一)六月某日(現在の暦では、八月頃)
 - 津村涼庵(秋田藩御用達商人、随筆家) 『阿古屋の松』天明元年(一七八一)九月二十日〜二十五日(現在の暦では、十一月五日〜十日)
 - 人見蕉雨(秋田藩士、文人) 『夏の木草』享和元年(一八〇一)六月十四日〜十九日(現在の暦では、七月二十四日〜二十九日)
- 旅の年月はさまざまですが、一様に男鹿半島西海岸の「島めぐり」を希望しました。当時から、島めぐりが男鹿観光の呼び物の一つだったことがわかります。ただし益戸滄洲だけが、雨がやまなかつたため、『鹿の細道』の旅での島めぐりを断念しています。

第62回企画コーナー展



真澄と俳諧

平成25年 10月12日(土)~12月1日(日)

菅江真澄遊覧記からは、真澄が各地の肝煎、商人、藩士、寺社の僧や神官などと交流しながら旅を続けたことを読み取ることができます。これらの人々の多くは、文芸の素養があり、歌や俳諧などをたしなんでいました。真澄の旅は、これら各地の文人たちのつながりの中で展開したと考えられます。

真澄はもとより、歌を詠う「うた人」でした。一方で、旅の交流の中では句も詠じ、『菅江真澄全集』（未来社刊）からは、五十余りの句を拾い出すことができます。

本展では、真澄が詠じた句を詳細に見ていくとともに、俳諧に視点を置きながら、文人たちとの交流や真澄の関心事などを取り上げてみました。

俳諧が、菅江真澄遊覧記を読み解く手がかりの一つになるのかもしれませんが。

1

真澄が詠んだ句

真澄が詠んだ俳諧（抽出は、未来社刊『菅江真澄全集』から）					
書名	全集頁	句(人物については省略)	真澄句	形態	
1	伊那の中路	①33	舟に聞く涼しき声やまつのかげ	→ みの毛ふかれて眠る白鷺	短連句
2	伊那の中路	①45	あるかなきかの身に月のかげ	→ 問見れば結梗が原の露白し	短連句
3	くめじの橋	①168	良耳(蘭)の香やてらが袖にとめかねつ	→ たのしきや夕がほたちは秋ながら	発句
4	くめじの橋	①182	月に鳴むしの音くらし草のなか	→ 秋の花野をつくす言の葉	短連句
5	秋田のかりね	①217		→ そりのあと一筋見えてくれにけり	発句
6	けふのせぼのの	①315	見とどけよ木々の錦のしたしみず	→ ひとりほらはん露のやまみち	短連句
7	けふのせぼのの	①321	今朝ぞしる手をわかつとき日のさむみ	→ 袖にきのふの露氷る也	短連句
8	はしわの若葉 続	①250	わかれちのかたはらにまたあは穂かな	→ にくるましの眼さへつゆけき	短連句
9	はしわの若葉 続	①250	一夜／＼月や紅葉にそめなさん	→ 露しきて寝む尾毎／＼に	短連句
10	はしわの若葉 続	①250	ひいといふこゝろ猶きかんあきのかげ	→ かゝしの笠にしぶく山風	短連句
11	牧の冬枯	②271	杉の葉に露おくけさのわかれかな	→ 猶袖寒きおのはまかげ	短連句
12			幸にけふおもはず友にあふひかな	→ 待つけてきくやまほととぎす	
13	奥の浦々	②315	真朝にいさきもつちの音	→ いざなひてゆかばや里の見ゆるまで	連句
14			島松の梢ほのかに出る月(珠阿上人か?)	→ あしふく軒にころもうつなり	
15			仏の身灌くしづくやのりの海	→ 卯の花山のしらむあけほの	
16	奥の浦々	②315	閑鈴むしのこゑも珠勝ぬ	→ 名香の薫る台(うてな)にまだあして	連句
17			出るより月の照そふ高様に	→ 薄に残るむらさめのつゆ	
18	牧の朝露	②364	露の巢にさるやさかゝる露のなか わしの声さそふやはけしあきのかげ 和之(わし)は何鬼神もすまんみねのきり	→ けそう石なびくすがたや女郎花	発句
19	おぶちの牧	②390		→ 銜(ちどり)開てねぬ夜まつらん神のむろ	発句
20	おぶちの牧	②394		→ 円居して時雨をよそに聞夜かな	発句
21	奥の冬ごもり	②476	鉢の木の恵をこゝに火蔵かな	→ 雪の一夜をうすき小傘	短連句
22	奥の冬ごもり	②476	鳴呼雪ぐついで／＼おもき名残かな	→ 留る手冨る門のあさかげ	短連句
23	外浜奇勝	③125	恥かしやおとこ世帯の氷餅	→ 厭たんで語るさしくみ	短連句
24	外浜奇勝	③127	浦山にあかで照にも湧るにも	→ 夏と冬のうさおみひやれ	短連句
25	外浜奇勝	③164	雲わけて入る峰高し久須黎(くすり)かり	→ そでにあやめの残るうつり香	短連句
26	外浜奇勝	③164	岩がねを枕にあけん具秀離可理(くすり)かり	→ ひるもくひなのたたく谷の戸	短連句
27	外浜奇勝	③164	仙葉もあらんわか葉の奥の不二	→ 鹿子まだらの雪のうの波南	短連句
28	外浜奇勝	③164	雷ながら気味よく入る雲の峰	→ もすそくちめ栗花落(つゆ)の山わけ	短連句
29	外浜奇勝	③182	かり合にをりよくげの薫りかな	→ 秋とあざむく庭の真清水	短連句
30	外浜奇勝	③183	まれ人にこよひはまじるすゞみかな	→ 友たる友と見るなつの月	短連句
31	外浜奇勝	③186	華のぼる都多(つた)たりてや葉採り	→ 露に沾たるあさの小衣	短連句
32	外浜奇勝	③186		→ あはでけふわかるものか秋のかげ	発句
33	津軽のおち	③225	いざとはん木の下やみの駈道	→ しるべにたどる遠のうのはな	短連句
34	津軽のおち	③225	その家はふかてまたなんのき綾目	→ 薫る言の葉そでの久須太万	短連句
35	津軽のおち	③225	見送りの門にぎはしき機かな	→ こよひいつこにあやめしきねん	短連句
36	津軽のおち	③226	粽ゆふ男はぬめるすがたかな	→ とうめか菖蒲ふくまちはづれ	短連句
37	津軽のおち	③226	わずれ草のなかに忘れぬわかれかな	→ いとど夏笠を行まよはん	短連句
38	錦の浜(第二部)	③266	(付句をせず)	→ 面白うふくべうかべん春の水	短連句
39	錦の浜(第五部)	③284	折ふしは無事音づれよあまつ雁	→ 木萩が本の円居わずれじ	短連句
40	錦の浜(第五部)	③285	力無の髪を離れし出様珊瑚(あけび)かな	→ うれしやこれを秋の家土産	短連句
41	錦の浜(第五部)	③288		→ しぐれ晴て風に雨きくばせをかな(原漢字)	発句
42			雪笛にはしり付たるわかれかな	→ なみだのつらいつとけて寝ん	短連句
43			眺望やるその香はこれ冬の梅	→ 雪に付たるあとも恥かし	短連句
44			冬の日の梅かつ咲て別れかな	→ その木のもの雪は忘れじ	短連句
45			盛り見ん行きさ／＼は布由能高梅	→ 雪吹に袖も重き山越	短連句
46			枯る中に開出る冬の牡丹かな	→ 雪のあしたの名残ある屋戸	短連句
47			別れての宵やさびしき多万巨左部	→ 宿はいづこに檜火あたらん	短連句
48	すすきの出湯	③376		→ やゝはつかめだためたしはるのあめ	発句
49	すすきの出湯	③400	涼風や草のそよぎも海と山	→ 恥れば汗も滴かへる袖	短連句
50	浦の笛滝(第一部)	③430		→ 心葉にはつ日挿頭や宮の春	発句
51	男鹿の寒風	④257	しぐるゝや見よ無一物草の庵	→ 拳る拳に薫る山茶花	短連句
52	軒の山吹	④267	まみゆるも命なりけりほととぎす	→ 袖にこぼるゝ夏草の露	短連句

用語解説

●俳句と呼ばれる文芸は、もともとは連歌から発生した。連歌とは、和歌の上句に下句を付け、その下句に上句を付けていく形式を持つ。和歌として見たとき、それぞれが意味を持ちながら、連続して意味が展開していく。

●連歌には、古くから和歌に使われた歌語が使われるが、俗語・俚諺・漢語などの俳言を取り入れたものが「俳諧の連歌」と呼ばれ、しだいに俳諧とだけ呼ばれるようになった。よって、「連歌」と「俳諧の連歌」は形式的には同じである。「俳諧の連歌」を現在では一般に「連句」と呼ぶ。

●俳諧は、滑稽さや斬新さを主に追究したものになっていったが、文芸としての域に高めたのが松尾芭蕉であった。

●俳諧の連歌(連句)のうち、最初の発句(五七五)は、一連の上句下句の付合を方向付ける上で最も重視された。現在では、この発句を「俳句」と呼んでいる。

● 連句は、全体の句の数で呼び方が異なる。全体で百句のものを百韻、松尾芭蕉が得意とした三十六句を歌仙と呼ぶ。本展では、連歌での短連歌に倣い、上句に下句を付けただけのものを「短連句」と呼ぶ。

● 上句に下句、あるいは下句に上句を付けたものは、形式としては「前句付け」と呼ばれる。前句付けは滑稽さを重視して賞金稼ぎの遊びとして流行したため、文芸として発展した俳諧とは異なる。そのため、前句付けは「雑俳」として位置づけられる。

一覧表から

● 『菅江真澄全集』（未来社）から拾い出される真澄の俳諧は52を数える。

● 真澄の俳諧の多くは、現在の青森県内で詠まれたものである。番号11〜22は下北、番号23〜47は津軽。

● 交流した人から句を詠まれて、その句に付合をしている。よって「→」印が多い。

● 真澄の単独で詠んだ発句は7句である。

● 番号3は、五七五の句に対して、真澄も五七五の句で返している。真澄の句を発句とみなす。

● 番号18も、五七五の真澄の句に対して、三人の俳人がそれぞれ五七五の句で受けているので、真澄の句を含めたそれぞれを発句とみなす。

● 番号12〜14、15〜17はそれぞれ、上句と下句の遣り取りの連続性があるため、連句とみなす。

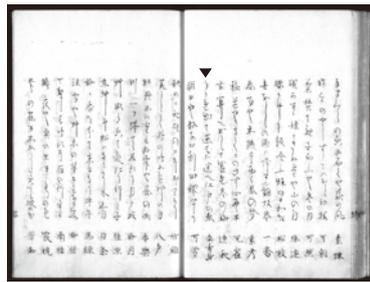
● 番号38には相手の付合はないが、文脈から真澄が付合を求めた発句であるから、短連句として分類する。

● 番号42〜47は、例えばA氏が詠んだ句に

真澄が付句をし、次にB氏が詠んだ句に真澄が付句をしている。真澄↓Bには意味の連続性がないため、短連句の連続とみなす。

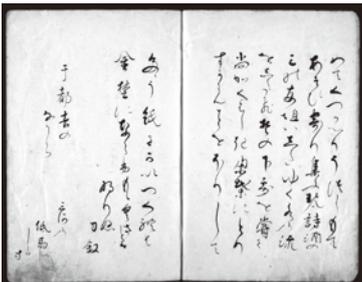
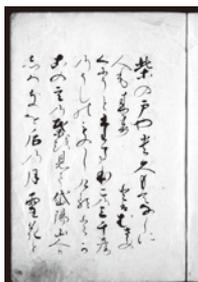
2 句集と真澄

俳諧法華（横手市立増田図書館蔵、掲載部分）



吉川五明の没後15年に当たっての追善句集として、文政2年（1819）3月に出版。五明の肖像を巻頭に掲げ、門人214名、国外俳人171名の句を集めている。この中に、「うかれ出て迷はば迷へ江戸の春 真寿身」とある。「真寿身」が菅江真澄だとされている。

百韻（翁草）（青森県立図書館蔵、序文）



江戸の俳人鈴木道彦の句を発句にして、津軽の俳人・遠藤文石、渡辺嵐尺、角田其友が百韻を交互に巻いた。寛政12年（1800）に編まれたこの俳書に、序文を寄せたのが「三河の低馬」である。この人物が、三河生まれで、当時、弘前藩庁に行動の制約を受けていたとされる真澄だと考えられている。文字には真澄の特徴が出ている。

3 図絵に添えられた俳諧



景正が片眼を拾ふ田螺かな 其角
掲載は『月の出羽路仙北郡十七』の図絵



岩橋や栄螺になるゝ蝸牛 五明
掲載は『男鹿の島風』の図絵

4 真澄と秋田の俳書

真澄の時代、秋田では吉川五明とその門人たちを中心として、盛んに俳書が出版されました。「真寿美」名の真澄の句が掲載された俳書としては、上に紹介した『俳諧法華』の他、『さよの月』があります。

『波羅都々美』（別本外題／秋田俳人俳画百人集、吐火吞刀）は、編者と版下筆跡・吉川五明、画・五十嵐嵐児、序文・那珂通博で寛政十年（一七九八）に出版されました。嵐児と通博は、後年、真澄と親しく交流した人物です。『絵扇』も五明と嵐児の二人によるものでした。『波羅都々美』と『絵扇』は、半丁に画と一句を組み合わせた絵俳書（例えばいしよ）と呼ばれるものです。

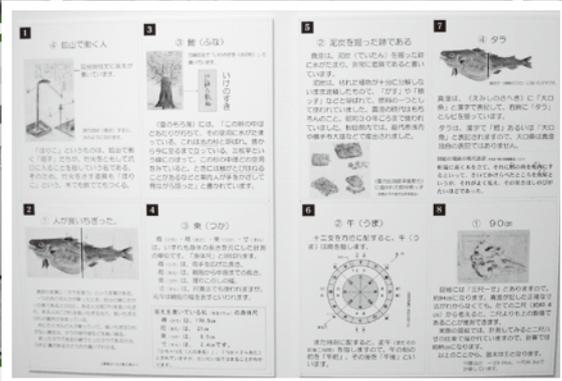
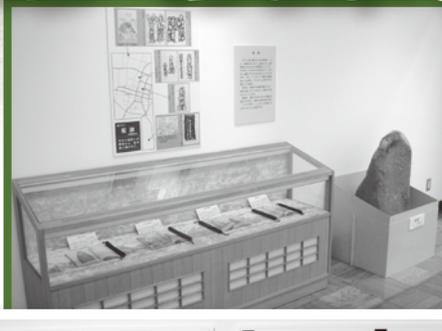
真澄が目にした俳書としては、昼寝（秋田市寺内）の俳人たちが、松尾芭蕉の百年忌を記念して出版した『月以都古』があります。この俳書には、冒頭、「月いつこ鐘はしづめる海の底」という、芭蕉の句を刻んだ芭蕉碑を因りて載せています。この句は、芭蕉が敦賀市金ヶ崎町（福井県）に伝わる沈鐘伝説を聞いて詠んだものです。真澄は、湖の底に鐘が沈んでいるとの話が八郎瀉にも伝わっていることを、『月以都古』を引用しながら『ひなの遊び（第四部）』に書いています。



諏訪神社に建つ芭蕉碑
（八郎瀉町夜叉袋）

菅江真澄と歩く美郷町

平成25年10月5日(土)
～11月24日(日)



菅江真澄は、文政七年（一八二四）から本格的な地誌編纂に取り組みました。はじめに全十四巻に及ぶ平鹿郡の地誌『雪の出羽路平鹿郡』を完成させてから、仙北郡の地誌『月の出羽路仙北郡』に取り組んでいます。その中で、現在の美郷町の町域には文政十年から翌年にかけて滞在し、巡村調査をおこなっています。

美郷町は、真澄の記述が多いばかりではなく、遺墨資料をはじめとする関連資料が現在でも数多く残っている土地でもあります。

本展は、真澄の記録をもとに、美郷町を見つめ直してもらいたいとの願いのもとに企画しました。郷土を見つめ直すことで、新たな発見があり、そこに暮らす意味が見出せるかもしれません。

本展は、資料御所蔵の方々の協力を得ながら、秋田県立博物館と美郷町学友館が共同で開催しました。（展示資料／約二百点）

1 記録者としての真澄

菅江真澄の記録者としての原点は、若いときからの旅の経験にあったと言えます。三河生まれの真澄は、旅の経験の中で土地によるものごとの類似や相違に着目しました。それは言葉や生活習慣であり、ひいては自然環境や歴史といったことにもつながります。それらへの興味が真澄の旅を支えるものとなり、文章や図絵を詳細に表すことになりました。そのような表現力は旅の中で培われたもので、次第に記録すべきものを見極める眼を養っていくことになったと言えます。

真澄の記録の中から、正月習俗、土器、古記録、板碑、清水、樹木にまつわる記録を横断的に取り上げながら、特に美郷町との関わりを紹介しました。

2 真澄を伝える

菅江真澄の記録が現在の私たちに広く読まれるようになるまでには、真澄の記録に価値を見いだし、記録を翻刻したり、研究を積み重ねたりした多くの先人たちの功績があります。今私たちが読む真澄の記録は、先人たちの努力の積み重ねなのです。美郷町には、真澄研究に功績があった二人の先人がいます。一人は、金沢東根生まれの深澤多市（一八七四～一九三四）です。特に、秋田の多くの古文書を取めた『秋田叢書』同菅江真澄集』公刊の業績が認められます。もう一人は、六郷出身の栗林治郎作（一八九二～一九六七）で、真澄の著作の写本づくりと資料の収集を行いました。栗林治郎作旧蔵資料は、現在、美郷町学友館の所蔵となっています。真澄研究にとって二人の功績を忘れるわけにはいきません。

3

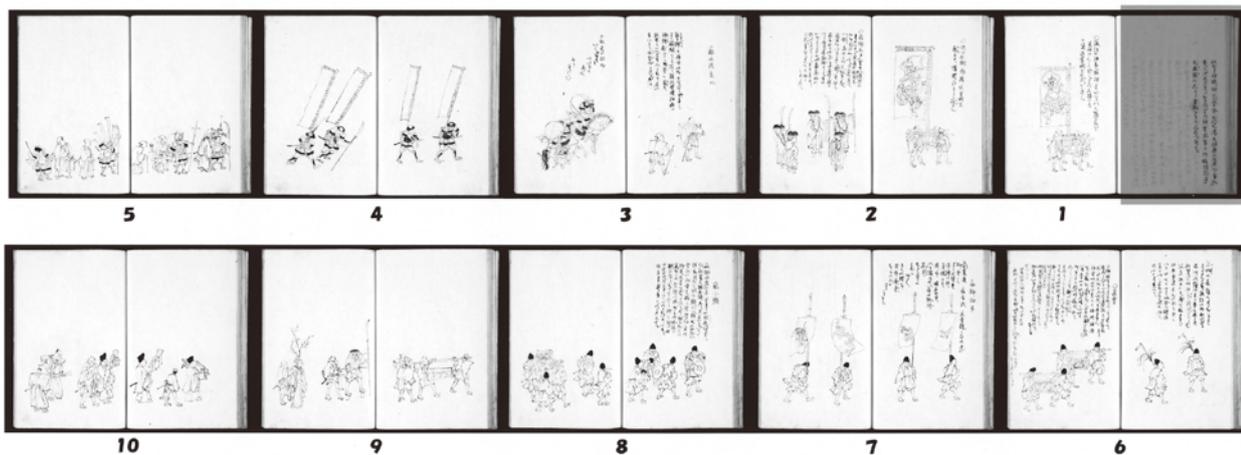
パネルで見える真澄の記録

菅江真澄の記録は冊子の形態が大部分ですので、展示しても見開き一丁分しか紹介することができません。しかし、展示パネルでは何丁分も見ることが出来ます。特に、美郷町に関わる「後三年合戦絵詞」（《月の出羽路仙北郡十八》）や「諏訪神社祭礼図」は、展示パネルにすることで絵巻物のように見ることが出来ます。

また、真澄の図絵は、細かなところまで描き込まれていることが大きな特徴となっています。部分的に拡大してみたり、あるいは他の著作から類似するものを拾い集めてみると、真澄の記録からその当時のようすがさまざまにわかってくるおもしろさがあります。



展示パネルの一例



※祭礼図は27丁（54頁分）にわたって描かれている。図絵は西宮四壁が描いたものである。

○諏訪神社祭礼図

《月の出羽路仙北郡十六》

4

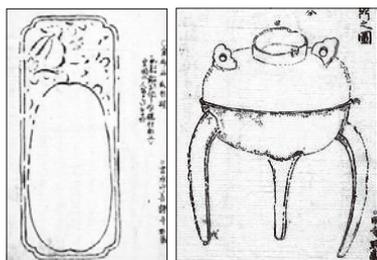
真澄、美郷町の記録

美郷町の町域に関する菅江真澄の記録は、文政九年（一八二六）から取り組んだ《月の出羽路仙北郡》（全二十五巻、二十五巻目は草稿）の中にあります。

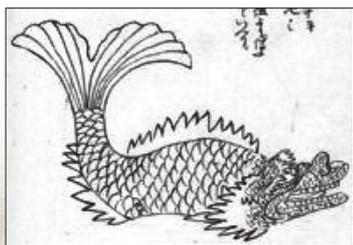
真澄の地誌のまとめ方は、秋田藩の在郷統治のしくみである親郷ごとに各巻を構成するものでした。そのため、美郷町に関しては、千畑地区が十四巻・二十巻・二十一巻、

六郷地区が十一巻・十四巻、仙南地区が十巻・十四巻・十七巻をそれぞれ見ていくこととなります。また、真澄は、寺院と神社が多かった六郷高野村については、寺院と神社にそれぞれ二巻を費やして詳しく紹介し、他地域の記録には見られない特別な記述をしています。

美郷町の特徴は、図絵に描かれた実物がいくつも現存することで、県内随一と言っても過言ではありません。遺墨資料を含めて貴重な資料の数々を紹介しました。



吉水山善証寺什物



秋田諏訪宮什物

吉水山善証寺什物が《月の出羽路仙北郡十二》、秋田諏訪宮什物が《同十六》に描かれている。

寄贈図書

平成25年2月
平成26年1月

- ◆伊藤敏雄「広報こじようめ連載『菅江真澄が五城目町を歩いた道』(全24回)」
- ◆男鹿市文化遺産を活かした観光振興・地域活性化実行委員会「重要無形民俗文化財 男鹿のナマハゲ」◆阿部幹男「東北の田村語り」◆男鹿市菅江真澄研究会「男鹿五風(会誌第十九号)」
- ◆醍醐を語る会「2000年の醍醐『雪の出羽路』で醍醐を読む」◆菅江真澄研究会「菅江真澄研究第79号・第80号・第81号」◆溝口常俊「名古屋大学大学院環境学研究科 教員・学生の見た東日本大震災」◆名古屋大学環境学研究科教員の見た東日本大震災」◆田口昌樹「いわな 第146号・第147号・第148号」
- 「あきた浪漫 第33号・第34号・第35号」◆秋山正義「石巻銭吹き唄の謎」 他

※寄贈図書は、スタディールームで御覧いただけます。

第63回企画コーナー展

随筆《久保田の落ち穂》の世界

平成26年2月8日(土)～3月23日(日)

随筆《久保田の落ち穂》(館蔵)は、久保田領(秋田藩領)にかかわる事柄を中心とした、全部で66項目からなる著作です。真澄の随筆の特徴は、連想から連想へと話題が移っていく傾向にあり、散漫な印象を受けるものも少なくありません。一方で、同書には、当時の秋田の人びとの暮らしぶりや文化的環境といったものを垣間見ることができ、絶好の材料がいくつも盛り込まれています。ここでは、展示の中から、序文に捺された二つの印章について紹介します。

表紙解説

日陰塚(青森県鯉ヶ沢町舞戸町) / 《津軽のおち》(館蔵写本)

企画コーナー展「真澄と俳諧」を開催するにあたり、真澄と芭蕉碑のことを考えていた。秋田県内には、真澄が亡くなる文政十二年(一八二九)以前に建てられた芭蕉碑が十四基ほどある。すべてを写真撮影してパネルで紹介するのが当初の目標だったが、結局、「真澄が見た芭蕉碑」ということで、県内外の五基を紹介した(後日、図絵にもう一基を見つけた)。その中に、青森県鯉ヶ沢町の芭蕉碑がある。前日に青森県立図書館で場所を調べて準備万端で行ってみると、里山の林道入口に標柱はあるのだが、足下の泥を気にしながら登った場所には、山畑が広がるばかりであった。聞き出す人もいず、ただ汗が流れてきていた。そこで意を決して、町の教育委員会に聞きに行くことにした。博物館に赴任して間もなく言われた「委員会など頼らずに、自分で調べるもんだ」という先輩学芸職員の言葉がトゲのように刺さっている。極力避けるべき手段ではあったのだが、秋田から出直すには時間が掛かる。それに一度は山を下って近所で聞いてもいたからだ。丁度、生涯学習課主催の講演会の最中ではあったが、以前に調査したという課員がわざわざ案内してくれた。さきほど私が探したところから、ヤブ道を突き抜け突き抜けて行ったところに、蔓に絡まりながら芭蕉碑(日陰塚)が建っていた。などと、そんな思い出が詰まった、私の渾身の一枚である。(日陰塚 / 「蝶の飛ぶ斗野なかの日のかけかな」天明三年(一七八三)建立)

「後藤氏印」



後藤家の蔵書印を示す「後藤氏印」(4.5cm、単郭朱方印)です。真澄の自筆本では、地誌《花のいではち松藤日記》に捺されています。

現在《花のいではち松藤日記》を所蔵する山崎照雄氏(八峰町)には、同書のほかに、「後藤氏印」が捺された書物が数多く残されています。それらによると、「後藤氏印」を使用したのは、380余石取の後藤正五郎家であることがわかります。中でも、真澄と同時代に生きた後藤祐恕(1766～?)という人物に関わりが深いと考えられます。祐恕は歌をよくした人物で、「天樹院公御題詠歌集」には真澄とともに歌が採られています。

真澄所用印



真澄所用印と呼ばれている2.9cm×2.6cmの複郭朱長方印です。印文の読みについては「生寛久吉」「生寶示吉」「生寶久吉」の諸説があり、また、糸印に分類する見方もあります。糸印とは、室町末期から用いられたとされる鑄銅印で、印文は文意を示すものではなく、文字などを装飾表現したものとされています。

真澄所用印は、重要文化財「菅江真澄遊覧記」(89冊)をはじめとする真澄の自筆本の多くに捺されていることから、真澄の自筆を示す一つの指標となっています。

館蔵糸印の印文



編集後記

・表紙解説を書きながら、今年度もさまざまな方から手助けや協力をお願いして調査や展示をおこなってきたことを思い出している。展示では、特に所蔵者の方々から善意あふれる対応をいただいた。お話をうかがって、知識を得たり大きなヒントを得たりして、その成果を展示解説資料や「かなせのざと」でお知らせしているが、ともすると独りよがりの駄文も多い。来年度は、国民文化祭を挟んだ時期に特別展「菅江真澄、旅のまなざし」を開催する予定である。真澄を通じていい出会いができることを願っている。同様に皆様にも。(松山)

真澄

MASUMI No.31

発行日◎平成26年3月14日
編集・発行◎秋田県立博物館 菅江真澄資料センター
〒010-0124 秋田市金足鳩崎字後山52
TEL.018-873-4121(代)